

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

安全・安心な米づくりと地域の交流促進による心豊かなむらづくり

受賞者 ひがしじょう ち い き のうぎょう しゅうだん
東條地域農業集団
かがわけんしやうずぐんしやうどしまちやう
(香川県小豆郡小豆島町)

■ 地域の沿革と概要

小豆島町は、瀬戸内海国立公園に浮かぶ小豆島の東部に位置している。平成18年3月21日に内海町うちのみちやうと池田町いけだちやうが合併し誕生した。

本町は、日本におけるオリーブ発祥の地として、また、壺井栄の小説を基にした映画「二十四の瞳」の舞台として全国的に知られている。オリーブ発祥の地にはオリーブ公園が、「二十四の瞳」の地には再映画化のセットを保存した二十四の瞳映画村にぎがあり、多くの観光客で賑わっている。その他にも日本三大渓谷美かんかけいに数えられる寒霞溪、18世紀頃に始まり、現在も伝承されている農村歌舞伎舞台など、数多くの観光スポットを有している。

本町の産業は、醤油や佃煮、素麺などの食品産業を中心に、電照菊やスモモなどの農業、大坂城築城からの歴史を有する石材業、豊かな観光資源を生かした観光関連産業、オリーブ製品の製造業が盛んである。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

東條地区は、小豆島町の東側に位置する小豆島町安田地区の南部に位置し、水稻栽培が中心である。周辺には、貯水量5万トンの古郷池などのため池がある。小豆島は、温暖少雨の瀬戸内式気候のため、水稻栽培が中心の地区では、水の確保は重要な課題であった。そのため、昔から地域でため池を守ろうという意識が強く、東條地区もその一つである。

また、同地区は、水田の圃場整備事業ほが実施された後、ため池からのパイ

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

| 事項 | 内容 |
|----------------|--|
| 地区の規模 | 集落(1) |
| 地区の性格 | 地縁的な集団等 |
| 農家率 (内訳) | 10.7% 総世帯数 793戸 総農家数 85戸 |
| 専業別農家数 (内訳) | 専業農家 18戸 1種兼業農家 1戸 2種兼業農家 12戸 |
| 農用地の状況 (内訳) | 総土地面積 469ha 耕地面積 31ha 田 17ha 畑 4ha 耕地率 6.6% 農家一戸当たり耕地面積 0.4ha |

配管により、用排水分離が行われた小豆郡唯一の地区であり、水稲生産条件は郡内で最良である。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 圃場整備による効率化

東條地区の水稲栽培は、その経営規模が平均23aと非常に小さく、農業機械の大型化が困難で、水稲栽培の継続が非常に難しい状況であった。この状況を改善するため、昭和58年度から平成元年度にかけて圃場整備事業に取り組み、水田14.5haが整備された。その後、農地流動化事業により、土地所有者165名が水稲耕作者21名に集約され、耕作者1人当りの平均耕作面積は69aとなった。

イ 集落営農組織設立

東條地区では、圃場整備を契機に、水稲の受託者組織として昭和58年度に集落営農組織「東條地域農業集団」（以下「集団」という。）を設立した。設立当時、26戸の水稲農家が構成員でスタートし、現在は33戸となっている。集団は、農業技術の継承を目的としており、構成員として地域の非農家も受け入れている。構成員の中には、もともと非農家（土地持ち非農家を含む）であった5戸が加入している。現在、水田17haで米とイチゴ（約2ha）、畑6haでオリーブや野菜の栽培をしており、水田は安田地区の約4分の3を占めている。

平成14年には、農家の円滑な世代交代や農業技術の継承を目的として、組織設立時における構成員の後継者を中心とする青年部を組織化した。現在、青年部員14名全員が農業を継承するという意思を有している。

また、同年には、安全・安心で美味しい集団独自のブランド米の生産・販売が開始され、以降、集団の活動が徐々に活発化していった。

ウ 高齢化への対応

圃場整備後約20年が経過した平成19年頃から、耕作者の高齢化を背景に、耕作を行わない農業者が見られはじめた。集団では、こうした状況を真剣に受け止め、これらの農地を管理・活用するために、集団役員が中心となり農業委員と協力し、集団内で新たな耕作者を発掘・育成している。なお、こうした取組により、安田地区内に耕作放棄地は発生していない。

エ 環境保全の取組

平成19年度には、水稲栽培が環境に与える影響を軽減することを目的に、東條地域農業集団を核として自治会や小学校などとともに「東谷農村環境保全集団」を設立しており、農地・水環境保全向上対策を活用して農用地における法面の草刈りや水路の清掃などの取組を実施している。

また、同対策の「営農活動への支援」の取組として、化学合成農薬と

化学肥料が環境に与える影響を緩和するため、これらの施用量を県基準の半分以下に削減している。

さらに、平成24年度からは、地球温暖化防止の観点から環境保全型農業直接支援対策を活用し、水稻の前作として、炭酸ガスを吸収して土中に炭素を貯留するレンゲの栽培を実施している。



写真1 水路・農道の清掃活動

オ 地域住民との交流活動と食育活動

集団は、小学生や幼稚園児に対して「農業の大切さを実感し、関心や興味をもってもらいたい」との願いを持つようになり、平成17年に「農業に関連した絵画コンテスト」を開始した。それ以降、食育活動として田植えや稲刈り作業体験（平成18年～）、収穫したもち米でのおはぎ作り（平成20年～）、芋の植え付けや芋堀り（平成22年～）、かかし作りコンテスト（平成25年～）などを農協の助成を活用して実施している。

また、地域住民と米の収穫を祝い交流を深めるため、平成21年から収穫祭「安田の郷祭り」を開催している。収穫祭では、小学生等を対象として、古い農具を使用した脱穀体験などの食育活動を実施するとともに、餅つき大会など地域住民との交流も深めている。

平成24年度からは、香川県のグリーン・ツーリズム推進事業を活用して集団のホームページを開設し、これらの活動に島外からの体験希望者や移住希望者を募集するため、「小豆島グリーン・ツーリズム」のPRを開始した。

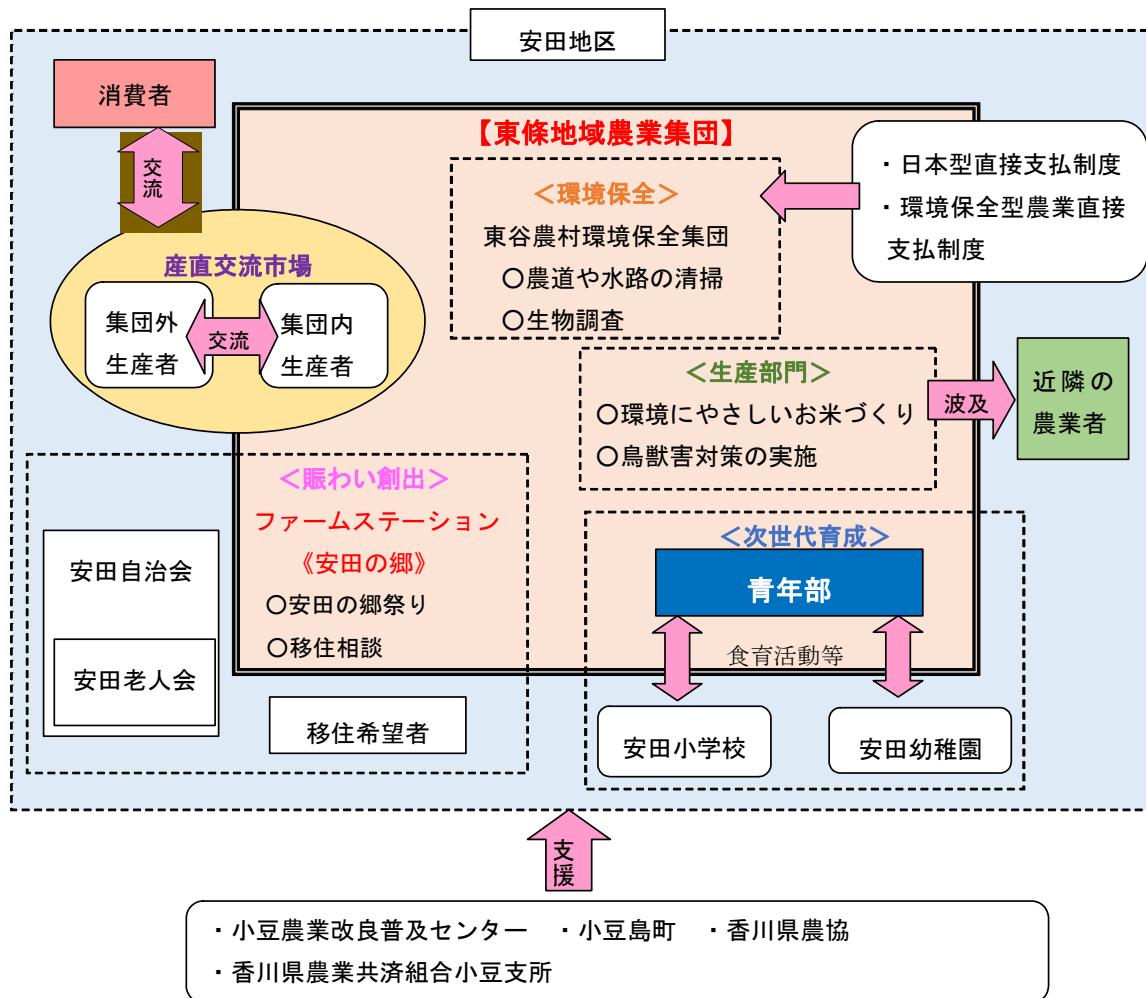


写真2 集団のホームページ

(2) むらづくりの推進体制

東條地域農業集団は、「次世代への農業継承」、「人と環境にやさしい安全・安心な米づくり」、「地域住民との交流」を目標に掲げ、次の4部門を設置し、むらづくり推進の核として、小学校や幼稚園、安田自治会や安田老人会等と連携しながら、活動を展開している。

第2図 むらづくり推進体制図



ア 生産部門

人と環境にやさしい安全・安心な米づくりを实践し、独自ブランド米「安田の郷」を販売。また、農作物の鳥獣被害防止のため、防護柵を設置・管理している。

イ 環境保全部門

集団を核とした「東谷農村環境保全集団」を設立し、安田小学校や安田幼稚園、地域住民と共に、農道や水路等の清掃等環境保全活動を実施している。

ウ 次世代育成部門

青年部が中心となり、安田小学校や安田幼稚園と連携して、田植えや稲刈りなどの農作業体験を実施。また、ホームページを開設し、島外からの農業体験希望者や移住希望者の募集活動を実施している。

エ 賑わい創出部門

収穫祭「安田の郷祭り」を開催するとともに、地域の農業交流施設として開設した「ファームステーション安田の郷」で、自治会や老人会、移住希望者等の交流の促進活動を実施している。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

集落営農組織である集団は、独自のブランド米の高付加価値化を図るため、生産技術の向上等に努めるとともに、農地や設備を貴重な地域共有の財産と認識し、農業技術や農地・設備の次世代への継承、後継者の確保、農村環境の保全について、行政等と連携しながら様々な活動を展開し、地域農業の牽引役となっている。

また、集団は農業生産のみならず、地域住民や島外の人々との交流等に主眼を置き、心豊かなむらづくりについても取り組んでいる。集団の行動力によって、地域住民も応援団となって活動に協力するという好循環が生まれ、地域の活性化につながっている。

集団内では、農業の後継者が確保され、その後継者が中心となって子供たちの農作業体験、食育活動等の次世代育成活動をしており、後継者は今後も確保されていくことが見込まれる。

さらに、集団は現状に満足することなく、法人化や6次産業化、移住者の受入施設の拡充などの課題を設定し、その解決に向けて取り組んでいるところであり、これまでの集団の活動実績から、今後も諸課題を解決し更なる発展をしていくことが大いに期待される。

2. 農業生産面における特徴

(1) 安全・安心な米づくり

集団構成員の多くは、兼業農家であると同時に、農産物の生産について消費者目線も有しており、安全性を最優先に考え、環境にやさしい先進的な栽培技術の習得意欲が高い。

人と環境への負荷を減らし、農業の自然循環機能の維持増進を図るため、水稻の減化学合成農薬・無化学肥料栽培に取り組んでおり、平成19年には構成員全員がエコファーマーの認定を受け、「安全・安心で美味しい米づくり」を実践している。

集団は、水稻耕作者の構成員に対して、

- 土壌診断の実施
- 食味値の測定
- 統一した包装での販売
- コスト削減のため農薬・肥料の共同購入
- 品質改善のための農産物検査の受検
- 水田への生産履歴板設置・記入と生産履歴書への転記・提出

を義務付けるとともに、栽培技術の向上・統一のため、年間10回程度の講習会を開催している。また、集団構成員以外の農業者に対しても、これらの栽培技術を供与している。

(2) 化学合成農薬の削減の取組

化学合成農薬の使用を減らすため、育苗段階での種子消毒を温湯消毒にするとともに、育苗時の苗立枯病対策として、微生物農薬を使用している。

また、斑点米の発生を抑制するため、カメムシの発生源となる圃場周辺の雑草について、関係する生産者が協力して一斉に刈り取るとともに、病害虫の発生状況を圃場ごとに確認し、必要な圃場のみに限定して化学合成農薬を使用している。

(3) 化学肥料の削減の取組

化学肥料を削減するためには、土の状態を明確に把握する必要があるため、平成19年から土壌分析を実施しており、その分析結果に基づいて圃場ごとの肥料施用量を決定している。

また、平成19から23年までは、地区内の畜産農業者と連携して牛ふん堆肥を施用し、化学肥料(窒素成分)は、香川県における慣行基準の半分以下に削減した。これらの取組によって地力が向上し、米の収量や品質が向上した。

平成24年以降は、水稻の前作にレンゲを栽培し、地力窒素を活用することで化学肥料は全く施用されていない。

(4) 水稻栽培管理共同化

水稻の共同育苗、田植え、収穫、乾燥調整作業の受委託などについて、効率的な生産を行うための体制を確立している。

特に、労力が一時期に集中する除草剤と病害虫防除薬剤の散布は、作業精度を高めるため、作業オペレーターを限定し集団が一括して実施している。

(5) 独自ブランド米の販売

他産地の米との差別化を図るため、平成14年から独自ブランド米「安田の郷」の生産・販売を開始した。

以降、集団の構成員自らが地道に販売活動を行って知名度を徐々に向上させ、平成25年には農協産直市や町の指定管理を受けたレストラン等へ販売し、さらには学校給食へも供給している。



写真3 ブランド米「安田の郷」

価格は、販売開始から玄米30kg当たり10,500円、白米10kg当たり4,500円と一貫して変えていないが、年末までには完売する状況となっており、集団は生産拡大を検討している。

(6) 獣害防止対策

近年、シカやイノシシによる水稻の食害等が発生しており、その被害を防止するため、集団が地区内農業者等と地域ぐるみで協力し、地区内水田、畑地、樹園地の外周に防護柵を設置している。また、防護柵の設置後の維持管理についても、集団が中心となり実施している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 農村環境の保全

農村環境を守る活動については、地域住民と共に積極的に展開しており、地域内の川を「シジミの川」、里山を「蛍の里」と名付けるなど、農道や水路の清掃等環境保全活動に取り組んでいる。

また、地域内において生物調査を地元小学生と共に実施し、地区内環境の現状を把握しており、保全の重要性を再確認している。

(2) 農作業体験の実施

地元小学校の児童や幼稚園児の学童農園として、稲の田植えや収穫体験、手作業による脱穀体験活動を実施している。農作業体験のほか、水稻を鳥の食害から守るためのかかしづくりにも子供たちと取り組んでいる。

また、平成24年にホームページを開設し、島外の消費者の農作業体験を受け入れるなど、活動の輪を広げている。



写真4 田植え体験

(3) 収穫祭「安田の郷祭り」の開催

農村環境を守る取組の集大成として、平成21年度から収穫祭を開催している。収穫祭には、小学生・幼稚園児や保護者など120名余りが参加し、稲刈り体験や脱穀作業体験に取り組んでいる。

その他、米の試食・販売、学童農園で栽培したもち米を使った餅つき等を行い、地域住民と共に収穫を祝っている。来場者数は年々増加し、平成25年度には約3千人が来場している。

(4) 「ファームステーション安田の郷」の開設

平成25年4月、小学校の旧校舎を
集団構成員が中心となって改修し、
東條地域の農業交流施設として「フ
ァームステーション安田の郷」を開
設した。

この交流施設は、集団の活動拠点
であるとともに、地区住民や移住希
望者等との交流の場として利用され
ているほか、地元の子供たちが農業
体験を通じて、農業に対する関心を高める学習の場として開放している。

また、地区で収穫した農産物を販売するとともに、農業者と消費者の交流を深める場とするため、毎週土曜日には産地交流市場として農業者に施設を提供している。東條地区に農地を有する他の地区の栽培者も野菜を持ち寄って販売し、地元の多くの人々が来店し賑わっている。集団は、この施設を更に拡充することを検討している。



写真5 産直交流市場

(5) 学生との交流と拠点施設の拡充

集団が小学校の旧校舎「ファーム
ステーション安田の郷」を地域づく
りの拠点としていることについて、
立命館大学（京都市）で建築学を選
考する学生が興味を示し、集団も安
田の郷の機能拡充を検討していたこ
とから、小豆島町の「地域おこし協
力隊」の仲介により、平成24年から
両者の交流が始まった。

学生たちは、設計図や模型を作成
して交流施設の拡張案を提案し、集団と協議するなど、若いエネルギーにより地域が一層活性化している。現在までに学生たちが手がけた取組の成果には、施設の敷地内に設置した憩いのスペースである「ふれあいハーブガーデン」がある。集団はそれを更に拡張し、農家カフェを営業する準備を進めている。

集団は、農業従事を希望する移住者の募集等をホームページを開設して進めている。この交流を通して、移住希望者の受入れを更に前向きに考えるようになり、研修室や宿泊施設など移住希望者の受け皿となる施設の整備を目指すこととしている。今後は、トイレや水道設備等の整備も検討しながら、施設の拡充に向けて学生たちが図面を作成し「ファームステーション安田の郷」の拡充工事に着手する予定となっている。



写真6 施設拡張案を提案する学生